

研究報告

コロナ禍後の幼児教育から小学校教育への接続に関する一考察

～カリキュラム・マネジメントの視点から～

工藤ゆかり¹⁾ 西出 勉²⁾

1) 北翔大学教育文化学部教育学科 2) 北方圏学術情報センター学外研究員

抄 録

本研究はコロナ禍後の幼児教育から小学校教育への接続の実際について明らかにするため、聞き取り調査を通してカリキュラム・マネジメントにおける「教育活動系列」と「経営活動系列」に着目し分析・考察を行ったものである。「教育活動系列」については、幼児教育におけるPDCAサイクルに基づいた保育の展開プロセスを提示し、生活科の評価規準を援用した保育の見取りについて提案した。「経営活動系列」については、分散型リーダーシップの理論に基づき、幼小の接続に向けた園長や校長、主任のリーダーシップ実践の実像を明らかにした。一連の保育実践について、PDCAサイクルを踏まえた保育の見取りの実際と幼小接続の教育活動を組織化するリーダーシップ実践の2つの側面から、その実像を明らかにすることを試みた。

キーワード：カリキュラム・マネジメント、保育の展開プロセス、保育の見取りと生活科、分散型リーダーシップ、トップリーダー（園長、校長）とミドルリーダー（主任）

I. 研究の背景と目的

幼児期の子どもの特性を踏まえ遊びを通しての指導を中心として行う幼児教育と、各教科等の学習を通して、自覚的な学びを目指す小学校教育との接続の重要性に着目し、現在に至るまで様々な取組が行われてきた。

古くは1923（大正12）年に日本初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園の当時園長であった倉橋惣三が「幼稚園から小学校へ幼稚園と小学校幼年級の眞の聯結」(倉橋 1923)にて、幼稚園と小学校の教育をあまりにも区別している問題点を指摘し、3歳から8歳までの教育を1つの教育区分として幼児教育の生活や学びの在り方を小学校の幼学年級（1・2年次）で行っていくことが眞の幼稚園と小学校との連結になる¹⁾と論じている。いわば100年近く取り組まれてきた課題であると言える。

近年では、倉橋の提言を実現するが如く、1989（平成元）年に小学校1・2年生を対象とする新たな教科「生活科」が誕生した。開設の趣旨は、低学年の教育全体の充実を図るため、低学年児童の具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴から、直接体験を重視した学

習活動を展開し、意欲的に学習や生活をさせるため²⁾である。生活科が新設されたことをきっかけに、小学校の教職員が幼稚園の保育実践を見学したり、幼児と児童との交流活動が行われたりするようになった。

その後、2008（平成20）年度告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針と小学校学習指導要領には、幼稚園・保育所と小学校との接続を円滑に行うため、連携について新たに規定され、幼児と児童、幼児期の教育と児童期の教育に携わる教職員同士が交流することや意見交換、合同研究を設定することを通して円滑な接続を目指し、これを受けて様々な幼児教育を行う施設と小学校とで連携の取組がされるようになった。

しかしながら、2010（平成22）年11月報告の『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）』によると、幼小接続の課題について都道府県・市町村の教育委員会から、「幼小の教育の違いを十分理解・意識していない」との回答が34%あった。

具体的な違いとしては、幼児期の教育は修了までに育つことが期待される生きる力の基礎を培う心情、意欲、態度などについて、「～を味わう」、「～を感じる」などのように、その後の教育の方向付けを重視している。それに対して、児童期の教育は、「～ができるようにす

る」といった具体的な目標への到達を重視している。また、幼児期の教育は環境を通して行い、これにふさわしい指導方法として遊びを通した総合的な指導であり、児童期の教育は、教科カリキュラム等の実践のために各教科等から構成される時間割に基づく学級単位の集団指導が原則であること³⁾等の相違をあげている。

さらに、教職員の意識については、「幼児期の教育を担当する教職員は児童期の教育にあまり関心を示さず、幼児期の教育とそれ以降の教育との関係を十分に理解・意識せずに幼児を教育する傾向にあり、また、児童期の教育を担当する小学校の教員は、幼児期の教育にあまり関心を示さず、十分理解・意識せずに、あたかも児童を白紙の状態から指導しようとする傾向にある。」⁴⁾と教職員の意識の問題についても指摘している。

幼児教育と小学校教育を円滑に接続するには、まず教職員の意識改革が必要であり、その教職員が互いの教育について理解し合い、具体的な子どもの姿をイメージしながら教育課程をつなげていくことが求められる。

このような現状を踏まえ、平成29年度告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、幼児教育修了時の具体的な幼児の姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、小学校以降の学びへとつながるよう新たに策定された。

策定の主な趣旨は、「各幼稚園、保育所、認定こども園においては、幼児の発達や学びの個人差に留意しつつ、幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の姿を具体的にイメージして、日々の教育を行っていく必要がある。また、各小学校においては、各幼稚園、保育所、認定こども園と情報を共有し、幼児期の終わりの姿を理解した上で、幼小接続の具体的な取組を進めていくことが求められる。」⁵⁾である。このことは、100園あれば100通りと言われる幼児教育のばらつきや教育の始まりは小学校教育からという意識でそれまでの子どもの育ちに目を向けないままに教育をスタートさせる小学校教育の状況の改善につながることを期待される。

そのような中、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と小学校の教育活動とのつながりの具体像について、磯島・西出・大室（2023）らが分析した。この分析を通して、「幼稚園側は、小学校へ入学する子どもたちの姿を思い描きながら『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』について明確に押さえ日々の教育に取り組んでいくこと、一方、園児を受け入れる小学校側は、幼稚園の遊びや生活を通しての学びを小学校の入学時の時間割等に生かす『スタートカリキュラム』を作成し実践していくことを各々取り組むことが『幼小接続』の結末点になる」⁶⁾と述べており、今後活用されることを期待する。

このように、幼小接続の取組について様々な提案や実践がされ、一定の成果を上げる一方、同時に課題も明らかとなった。

文部科学省は令和4年度から3か年程度の計画で『幼保小の架け橋プログラム』に取り組み始めた。本プログラムでは、主な課題を次のように述べている。

<主な課題>

- 半数以上の園が行事の交流等にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていない。
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が到達目標と誤解され、連携の手がかりとして十分機能していない。
- スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない。
- 小学校側の取組が、教育方法の改善に踏み込まず学校探検等にとどまるケースが多い。⁷⁾

以上のような現状からその改善に向けて、本プログラムは、幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5歳児のカリキュラムとスタートカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育（低学年）の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを目的として取組をスタートした。

本研究では平成25年度から平成28年度まで札幌市の幼小接続モデル園・校として取り組んでいる札幌市立あつべつきた幼稚園と札幌市立厚別北小学校の実践に着目した。当初は「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」の連携から接続へと発展する過程の目安でステップ4（接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、さらによりよいものとなるよう検討が行われている段階）⁸⁾まで取り組まれていた。しかし、コロナ禍の3年間については、幼児と児童及び教職員同士の交流等を実施することが難しい状況にあった。その結果、幼小連携の状況はステップ1（連携・接続に着手したいが、まだ検討中である）⁹⁾の状況まで後戻りすることになり、これまでの実践の成果等をもとに改めて幼小連携の取組を再構築することが必要となった。現在はコロナ禍を乗り越え、園長がリーダーシップを発揮し全教職員の協力体制の下、教育活動の充実を目指す一つの方法として小学校教育との接続に取り組んでいる。

本研究ではカリキュラム・マネジメントの視点を通して、コロナ禍後の幼児教育から小学校教育への接続の実際について分析し、今後の在り方等について提案することを目的として研究報告する。

II. 研究の方法

田村は「カリキュラム・マネジメント」の全体構造を「カリキュラムマネジメント・モデル」^(註1)（以下、モデルと表記する。）として提案している。モデルはマネジメントの基軸を「教育活動（連関性）（カリキュラムを『つなぐ』）」と「経営活動（協働性）（人と人を『つなぐ』）」の二つの側面から提案している。

本稿では、「教育活動（連関性）」である保育実践の流れ（保育プロセス）と「経営活動（協働性）」に位置する保育実践を支える園長や校長、主任等のリーダーシップ実践に着目し、分析を行う。

保育実践の分析については、札幌市立あつべつきた幼稚園にご協力いただき、園長である白杵朋子先生及び主任である大高美恵先生から、筆者2名により聞き取り調査を行った。また、連携先である札幌市立厚別北小学校の田川則紀校長先生からも通信等の資料の提供をいただいた。

<聞き取り調査等>

- 日時 1回目：令和5年6月27日（火）
 対象者 主任 大高 美恵
 2回目：令和5年7月7日（金）
 対象者 園長 白杵 朋子
 対象者 主任 大高 美恵
 場所 札幌市立あつべつ北幼稚園
 その他 ・保育実践に関する資料収集
 ・小学校の通信等の資料収集

1. 教育活動の視点から

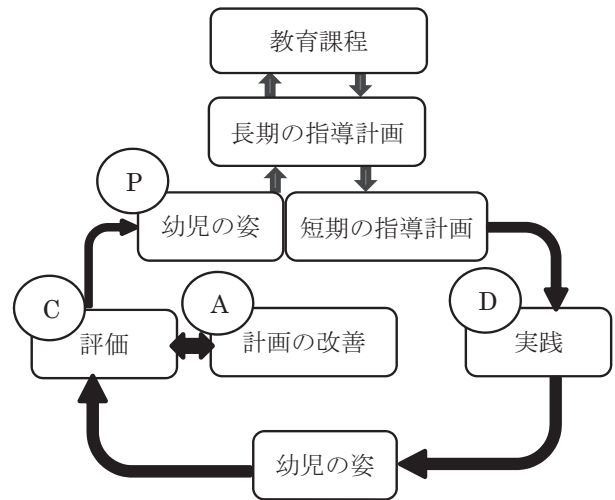
(1) 幼児教育におけるカリキュラム・マネジメント

幼児教育では、『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開』（2021）にあるように、「環境を通して行う教育を基本として、①幼児期にふさわしい生活の展開、②幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導、③一人一人の発達の特성에応じた指導に留意し、幼児一人一人が発達に必要な体験を得られるようにしています。このように幼稚園教育の基本を踏まえ、PDCAサイクルの好循環を通して、組織的かつ計画的に各園の教育活動の質向上を図る『カリキュラム・マネジメント』が大切です。』¹⁰⁾とある。

保育の展開と指導計画、教育課程との関係性は、それぞれの園で教育期間全体にわたって育みたい資質・能力を踏まえつつ、各園の特性を生かして幼児の充実した生活を展開するための計画が教育課程である。そこから長期的に発達を見通した年、学期、月等にわたる長期の指

導計画、具体的な幼児の生活に即して作成する週の指導計画（週案）や日の指導計画（日案）等の短期の指導計画を作成し、幼児の活動に応じた柔軟な指導にあたる。そのいずれの計画においても、PDCAサイクルで計画、実践、評価、改善し、教育活動の向上を図る。

以上のように幼児教育における教育課程の編成・実施等が実際に行われるが、そのイメージを「幼児教育における教育課程・指導計画のPDCAサイクル」として【図1】に表した。



【図1】 幼児教育における教育課程・指導計画のPDCAサイクル

本稿では、このPDCAサイクルに、『幼稚園教育要領解説』（2018）、『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開』（2021）から、保育の展開を以下のように押さえた。

【表1】 保育の展開

<p><Plan 計画></p> <ul style="list-style-type: none"> ①幼児の生活・発達する姿を捉える ②幼児の姿から、具体的なねらいを設定する ③具体的なねらいから、具体的な内容を設定する ④具体的な内容から、幼児の行う活動を考える ⑤環境の構成をする <p><Do 実践></p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥幼児が環境に関わって活動を展開する ⑦活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助を行う ⑧幼児の変化から環境を再構成する <p><Check 評価 ⇒ Action 改善></p> <ul style="list-style-type: none"> ⑨指導の過程についての評価を行い、指導計画の改善を図る¹¹⁾¹²⁾
--

(2) 小学校教育におけるカリキュラム・マネジメント

小学校教育では、小学校学習指導要領（平成29年度告

示) 総則編において「4 カリキュラム・マネジメントの充実(第1章第1の4)」について述べられており、次の3つの側面から整理されている。

＜カリキュラム・マネジメントの3つの側面＞

- ①児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと。
- ②教育課程の実施状況を評価して、その改善を図っていくこと。
- ③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともに、その改善を図っていくこと。¹³⁾

以上、①～③の3つの側面に留意し、各学校の教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動を展開し、その質の向上を図ることを重視している。教育課程編成や改善の手順の一例として、以下のように示された。

＜教育課程の編成や改善の手順＞

- (1) 教育課程の編成に対する学校の基本方針を明確にする。
- (2) 教育課程の編成・実施のための組織と日程を決める。
- (3) 教育課程の編成のための事前の研究や調査をする。
- (4) 学校の教育目標など教育課程の編成の基本となる事項を定める。
- (5) 教育課程を編成する。
- (6) 教育課程を評価し改善する。¹⁴⁾

小学校教育におけるカリキュラム・マネジメントの考え方は幼児教育におけるカリキュラム・マネジメントと同様であり、目指す方向性は教育活動の質の向上を図ることである。改善志向に基づいた好循環のPDCAサイクルを駆動し、日々の実践の見直しを図っていくカリキュラム・マネジメントの充実は、幼児教育にも小学校教育にも共通に求められる不易の原理原則と言えるものである。

また、小学校の学習プロセス(学習過程)は問題解決的な学びを基本としながら、授業展開は一般的に「導入」「展開」「整理」の各段階を経て、各教科等の目標達成に向けて取り組まれる。

(3) 生活科の学習過程との関連

生活科は、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指す¹⁵⁾教科

である。入学当初の1年生は、幼児教育から小学校教育へと円滑に移行することが求められており、その中心的な役割を果たす教科が生活科である。幼児教育から小学校教育へ滑らかに接続するには、年長児から小学校1年生にかけて子どもの発達段階や学びの連続性を考慮して実践していくことが重要である。低学年児童の特質としては、対象(人、社会、自然)を自分との関りで一体的に捉える傾向があり、この点は幼児期の発達段階の特性と重なり合う部分である。

また、幼児教育は「環境を通して行う教育」を基本としており、幼児一人一人が発達に必要な体験を得られることを大切にしている。一方、「生活科」は、身近な環境と直接関わる活動や体験を重視しており、発達や学びの連続性の視点から幼児教育と生活科の教科特性は親和性が高いと言える。

生活科は、「一連の学習活動の「まとまり」としての単元の中で、体験活動と表現活動が繰り返されることで児童の学びの質を高めていく。」¹⁶⁾ところに特色がある。また、生活科の学習過程は、以下のように行われる。

【表2】生活科の学習過程

<ul style="list-style-type: none"> (1) 思いや願いをもつ (2) 活動や体験をする (3) 感じる・考える (4) 表現する・行為する(伝え合う・振り返る)¹⁷⁾

生活科の学習過程は、【表1】の保育の展開(幼児教育のプロセス)との関連から、幼児教育と共有できる側面を次のように考えることができる。

＜幼児教育と共有できる側面＞

- ア 幼児の思いや願いを第一義に考え、生かすこと。
- イ 幼児の直接的な体験や経験の積み重ねを大切にしていること。
- ウ ア及びイを通して、幼児が感じたことや気付いたこと、思ったことを最大限生かしていくこと。
- エ ウを大切にしながら、幼児自ら表現するなど、自発的な活動を重視し、次の活動につなげていくこと。

以上、ア～エのような考え方にに基づき【表1】の保育の展開について、幼児教育のPDCAサイクルと生活科の学習過程との関連を加味して、次のように整理し「保育の展開プロセス(幼児教育のプロセス)」としておさえた。

【表3】保育の展開プロセス（幼児教育のプロセス）

<p>(1) 思いや願いをもつ</p> <p><Plan 計画> ～ 「思いや願いの重視」</p> <p>① 幼児の生活・発達する姿を捉える</p> <p>② 幼児の姿から、具体的なねらいを設定する</p> <p>③ 具体的なねらいから、具体的な内容を設定する</p> <p>④ 具体的な内容から、幼児の行う活動を考える</p> <p>⑤ 環境の構成をする</p> <p>(2) 活動や体験をする</p> <p><Do 実践> ～ 「環境との出会い」の重視</p> <p>⑥ 幼児が環境に関わって活動を展開する</p> <p>⑦ 活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助を行う</p> <p>(3) 感じる・考える</p> <p><Do 実践> ～ 「幼児の変容(情動と思考)の重視」</p> <p>⑦ 活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助を行う</p> <p>⑧ 幼児の変化から環境を再構成する</p> <p>(4) 表現する・行為する(伝え合う・振り返る)</p> <p><Do 実践 + Check 評価 + Action 改善></p> <p>～ 「幼児の自己表現の重視」</p> <p>「情動と思考の重視」</p> <p>⑦ 活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助を行う</p> <p>⑧ 幼児の変化から環境を再構成する</p> <p>※(1)～(4)は、「生活科の学習過程」である。</p>
--

このように保育の展開プロセス（幼児教育のプロセス）を考えた場合、子どもの姿の捉え方（見取り）や教師の環境の構成、教師の関わり方、指導方法等には幼小間において共通点があり、幼小の教師同士で保育や教育活動の改善に向けた手段や方法について共有できる側面が多いと考えられる。

以上のことから本稿では、幼児教育と小学校教育におけるカリキュラム・マネジメントの視点から、保育実践のPDCAサイクルと生活科の学習過程に着目し、幼小連携・接続の推進に当たって教師間で共有できる要素や考え方等について分析していく。

(4) 生活科の学習評価との関連

小学校学習指導要領総則編には「小学校の入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを児童や学校、地域の実情を踏まえて編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められ

る。」¹⁸⁾と述べられている。いわば、幼児教育の理念や方法が色濃く受け継がれているのが生活科である。

生活科は、以下の(1)～(3)の資質・能力を育成することを目指し、児童にどのような力が育成されたのかを評価する。

(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。**(知識及び技能の基礎) ⇒**

○生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになったのかを評価する。

(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようになる。

(思考力、判断力、表現力等の基礎) ⇒

●生活の中で、気付いたこと、できるようになったことを使って、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするかを評価する。

(3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしようとする態度を養う。

(学びに向かう力、人間性等) ⇒

◎どのような心情、意欲、態度などを育み、よりよい生活を営むかを評価する。¹⁹⁾

上記のことから生活科の評価は、幼児期に育みたい資質・能力や見取りの観点とほぼ重なる。相違点は、小学校教育が「生活の中で」であるのに対し、幼児教育は「遊びや生活の中で」である。

本稿では、幼児教育の評価である「幼児の発達の理解」に生活科の評価の考え方を援用して幼児の姿を見取ることにより、幼児期の教育に携わる教職員には児童期の教育へのつながりを、児童期の教育に携わる教職員には幼児期の教育の効果を認識してもらえないかと考えた。

具体的には、○、●、◎にある児童を評価する視点を「幼児の姿」と関連付けながら、生活科の学習評価の手順や評価方法等を幼児教育の見取りの手法として活用することを考えていく。

2. 経営活動の視点から

経営活動については、モデルの要素である「リーダーシップ」に着目し、幼児の図書館訪問が実現するプロセスにおける園長や校長、主任等のリーダーシップ実践について分析する。

リーダーシップについては、教育活動に働きかける「教育的リーダーシップ」や人的・物的環境を整備することにより間接的に教育活動を支援する「管理・技術的リーダーシップ」、学校内の人間関係や校風をポジティブなものに変えることで教育活動を活性化する「文化的リーダーシップ」等がある。²⁰⁾

本実践事例は幼稚園と小学校の学校種が異なる学校間連携であるが、幼小間において図書館訪問が実現する前後に園長や校長、主任等のリーダーシップ実践がその時々状況に応じて学校種や職位を超え分散化されているところに特色がある。このようなことから本稿では「分散型リーダーシップ」^(註2)の視点から、幼小連携における取組の推進について、各リーダーの認識とマネジメント行動について分析・考察を行っていく。

Ⅲ. 実践研究の展開と結果

1. 幼小接続の取組の経緯

前述の通り、札幌市立あつべつきた幼稚園と札幌市立厚別北小学校は、平成25年度から札幌市の幼小接続のモデル園・校として、幼小連携の実践に取り組んできた。

具体的な連携内容としては、小学校のグラウンドやプールを幼稚園児が使わせてもらうという施設の交流、小学生の生活発表会を参観する、2年生が生活科の中で、5年生が総合的な学習の時間の中で幼児の遊びを企画し幼児が体験する等の幼児と児童との交流、幼稚園から就学した児童について情報交換をする、互いの研究について協議する教職員の交流、接続を見通して編成・実施された教育課程について実践結果を踏まえさらによりよいものとなるよう検討をすることで取り組んできた。

しかしながら、令和2年度からは新型コロナウイルス感染症への対応で、交流活動は限定的に行われていた3年間を過ごした。令和4年度には幼稚園からコロナ禍前に行っていた園児と児童との交流などを申し出たところ小学校側の現状から簡単には交流が出来ない状況であると感じたとのことである。

そして、令和4年度から改めて双方にとって無理のない取組をリスタートすることにし、園長・校長の了解のもと交流活動に再度取り組み始めた。令和5年3月には図書館の利用について園長から校長に打診し、4月には幼稚園の職員で話し合った願いや図書館利用のねらい等を明らかにして、共通理解を図るべくその内容を校長、教頭、教務主任宛メールで送っていたとのことである。

2. 「カエルの卵の飼育保育実践」の流れ

令和5年3月、図書室の利用について園長から校長に打診し、4月には図書館利用のねらい及び幼稚園の職員で話し合った願いなどを校長、教頭、教務主任宛メールで送っていたとのことである。

<事前> ～訪問までの活動～

カエルの卵を飼い始めた5歳児年長組。なかなかオタマジャクシにならないことに2人の幼児が気づき、「どうしてオタマジャクシにならないんだろう」と疑問を抱いた。同時にオタマジャクシになることを期待していただけに、なかなかならないことを悲しんでいた。そこで、幼稚園にある図鑑を調べたが、卵がオタマジャクシにならない理由が分からないままであった。困った2人の幼児が担任と共に職員室に行き、主任教諭に「図書館ってどこかになかった?」と相談した。主任教諭は、園長が小学校との連携で図書館が利用できることを職員会議で言われたことを思い出し、このことをきっかけに小学校と交流を再開出来たらという願いをもち、「隣の小学校には図書館があるんだよ」と伝えた。

その意図を汲み取った担任教諭は保育室に戻り、当該幼児2人に周りの幼児も巻き込んで、小学校の図書館に行かせてもらえるように「校長先生にお手紙書こう」と言葉掛けた。幼児達は「めろんぐみのかえるのたまごがげんきがありません。」「こうちょうせんせいへ しょうがっこうのとしょかんに おたまじゃくしのほんはありますか?」と手紙を書き、事前に連絡をしたうえで隣の学校に届けに行った。校舎の外にいた教頭先生に手渡すことができ、その後手紙を受け取った校長先生からその日のうちに、図書室にてカエルの本をもち「さがしている ほんが ありそうだよ!」とフォトメッセージが教員宛に送られてきた。それを見た幼児達は喜び、小学校の図書館に行く計画を立てた。同時に、幼稚園から小学校に連絡し、図書館が利用できる日程を調整した。

<小学校訪問> ～図書館等～

後日小学校の図書館に行くと、校長先生、教頭先生が玄関で出迎えてくれた。「ちょっと遠回りして行きましょうか」ということで、1年生の授業風景を見せてもらった。机と椅子に付き、学習に取り組む1年生の姿を興味津々で見ている。その後、3階の図書室に向かった。図書室に着くと校長先生が「この本だね」とカエルの図鑑を見せてくれた。その後、幼児達は図書館を自由に散策し、自分たちでカエルの本を探し複数の本を見つけた。本を見て、カエルのことについて様々な知識を得ることが出来た。しかしながら、卵がオタマジャクシに

孵らないことについて書かれている本は見当たらず、わからないままであった。また、図書館には様々な本があることにも気付いた。

幼児達の調べ物が終了したところで、校長先生の案内で5年生の絵画や6年生の俳句を見せてもらい、「小学生はすごいな」と感心した。また、給食を準備しているところも見ることが出来、小学校に入学したら給食を食べるということを知ることができた。最後に校長室に寄り、校長先生の椅子に座らせてもらい、カエルのことのみではなく小学校の様々なことを知ることが出来、満足して園に戻った。

<事後> ～訪問後の活動～

小学校の図書館で見た本から、オタマジャクシの飼い方について知ることはできたが、卵がなぜオタマジャクシにならないのかを確認することはできなかった。カエルの卵は死んでいたようなので、新たなカエルの卵を飼い始め、本で調べた情報をもとに大切に育て、オタマジャクシからカエルになり、幼稚園の園庭にある田んぼに放したとのことである。

3. 「カエルの卵の飼育保育実践」の見取り

前述のように保育実践は進められたが、本実践の子ども姿を教師がどのように見取っているのかについて、園長及び主任の聞き取り調査の内容から想定し、「幼児教育のプロセス」に即して以下のように整理した。

具体的には、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」にある「育成を目指す資質・能力を踏まえた評価規準の作成のポイント」²¹⁾を援用し、幼児の育ち（姿）を生活科の評価規準の表記に置き換え、幼児の行動する姿（行動指標）として捉えるようにした。このことにより幼稚園教師の子ども姿の見取りを小学校の教師も幼児の行動する姿（行動指標）として理解できるものとする。以下、【表4】に保育実践の展開と幼児の見取りを示す。

【表4】保育実践のカリキュラム・マネジメント～「幼児の姿」の見取り

Plan ①幼児の生活・発達する姿を捉える ・担任教諭は、カエルの卵がオタマジャクシにならないことに疑問を抱き、同時に悲しんでいる幼児の姿を捉えた。
Plan ②ねらいを設定
※(1) 知識及び技能の基礎 (2) 思考力・判断力・表現力等の基礎 (3) 学びに向かう力・人間性等 (1) 生活の中で豊かな体験を通じて、カエルの卵の成長のプロセスやカエルに孵らない要因、カ

エルの卵の飼い方について知り、望ましいカエルの飼育をしようとする。 (2) カエルの卵がなぜ孵らないのか疑問を見つけて、今までのカエルの卵の成長の様子と比べて、調べて、飼い方を考える。 (3) 同じ疑問をもつ仲間と共に意欲をもって調べようとする。
Plan ③内容を設定 ・今まで経験したカエルの飼育について振り返り、現在の様子と比べ、図鑑を活用してカエルについて調べ、その性質や成長の過程に気付く。 ・カエルの卵に関わる中で、生命の尊さに気付き、大切に飼育しようとする。 ・同じ疑問をもつ仲間と共に調べたり、分かったことを共有したり、協力したりする。
Plan ④環境の構成 ・担任教諭は幼児がカエルの卵をじっくり観察できる場と時間を保障し、カエルの図鑑も準備した。
Do ⑥活動を展開 ・幼児はカエルの卵を日々観察した。 ・どうしてオタマジャクシにならないのか図鑑で調べた。 ・幼児の疑問は解決しないままであった。
Do ⑦適切な援助 ・担任教諭は幼児と共に職員室に行き、主任教諭に相談した。(調べる方法) ・主任教諭は、小学校の図書館を利用できること(する方法)を幼児に伝えた。 ・主任教諭は小学校の教務主任に図書館利用の打診を行った。
Action 指導計画の改善 ・ここ3年実施できなかった小学校の施設利用、小学校の教員と幼児との交流の計画を立案することを考えた。 ・同時に、実現に向けた小学校との連絡・調整を迅速に行った。
Plan ①幼児の生活・発達する姿を捉える ・自分達の疑問を解決できると、小学校の図書館に行くことに期待している姿を捉えた。
Plan ②ねらいを設定 ※コロナ禍で頓挫していた小学校との連携を再開する良い機会となると、主任教諭、担任教諭は考えた。〈場や機会の設定(手段の着目)〉
Plan ③内容を設定 ・担任教諭の誘いかけに応じ、当該幼児2名は手紙を書こうとする。その様子を見て周りの幼児も関心をもつであろう。

Do ⑦適切な援助 ⑧環境を再構成 ⑥活動を展開
・担任教諭は、当該幼児2名に校長先生に手紙を書く誘いかけた。 ・当該幼児2名は誘いかけに応じ、手紙を書いた。 ・その様子を見て、周りの幼児も関心をもった。
Check ⑨指導の過程について評価
・実現可能な方法を見出し、幼児に提案した。同時に、実現に向けた調整を迅速に行った。
□幼児の育ちの見取りと生活科の評価規準
●図書館利用を思い描きながら、手紙を書いている。 ◎カエルの卵が孵らない疑問を解決するために、図書館で調べるために校長先生に手紙を書こうとしている。
Action ⑨指導計画の改善
・ここ3年コロナ禍前のように実施できなかった小学校の施設利用、小学校の教員と幼児との交流を計画した。
□幼児の育ちの見取りと生活科の評価規準
○今までのカエルの卵の成長の様子と比較し、成長が遅いことに気付いている。
Do ⑥活動を展開 ⑦適切な援助
・手紙を小学校に届けに行く。校舎の外で待っていてくれた教頭先生に手渡すことができ、自分たちの思いを伝えられたという満足感を感じた。

Plan ①幼児の生活・発達する姿を捉える
・カエルの卵がオタマジャクシに孵らない原因はわからなかったが、図書室で調べたカエルの知識を活用してみたいと考えている幼児の姿を捉えた。
Action ⑨指導計画の改善 Plan ②ねらいを設定
・小学校の図書室で得た知識を活用してカエルの卵を再度飼育することは、考えたり、試したりすることにつながると判断した。 (1) 図書館で調べたカエルの飼育の仕方の知識を活かして飼育しようとする。 (2)(3) 前回の飼育の状況と比べながら、飼育の在り方を仲間や先生と考えながら飼育する。
Plan ③内容を設定する
・調べたことを生かしながら、みんなで観察、お話をしながらカエルの卵を飼育する。 (1) 図書館で調べたカエルの飼育の仕方の知識を活かして飼育しようとする。 (2) 前回の飼育の状況と比べながら、飼育の仕方を仲間や先生と考えながら飼育しようとする。 (3) 学んだことを生かして、カエルの飼育に取り組み、思いを実現しようとする。

Do ⑥活動を展開
・保育室でカエルの卵を飼育し、観察をしながらお世話をし、カエルになる。 ・カエルになったら、園庭の田んぼに放した。 ・家庭でも育てたい人は保護者と相談して持ち帰り、家庭でも飼育する。 ・カエルになったら幼稚園に持ってきて、園庭の田んぼに放した。
Check 幼児の生活・発達する姿を捉える
・カエル以外の動植物への興味・関心を向ける幼児の姿を捉えた。〈教師の見取り〉
Action 指導計画の改善
・カエルの卵の飼育を通して学んだことを次の生き物への関心や飼育に生かす。
幼児の育ちの見取りと生活科の評価規準
◎学んだことを生かして、カエルの卵の飼育に取り組み、思いを実現しようとしている。

5. 園長や校長、主任等のリーダーシップ実践

(1) 園長と校長のリーダーシップ実践

□図書室の活用については、昨年度末（令和4年度）の学校関係者評価委員会の際に園長から打診し「それもいいですね。」という話になった。そして、年度が変わって校長と保護者が同席した「教育説明会」（以下、「説明会」と表記する）と「学校関係者評価委員会」（以下、「委員会」と表記する）が4月20日（木）に開催された。その際に、令和5年度厚別北小学校との連携・交流計画について、保護者に対して説明が行われた。

＜園長の聞き取り調査から＞（下線は筆者の記述）

【P：計画段階】 ＜図書館の活用について＞
◇校長先生は「ねらいや意図が大事ですよ。どんなねらいで行うのか、そこが大切ですよ。」と言われました。他の先生方にも、「こんなねらいや意図があるんだ。」ということを伝えることが必要であると考え、校長先生と打ち合わせた内容を一覧にして打ち込んで伝えようと思いました。
◇ただお願いすることだけでなく、「ねらいや意図が大事ですよ。」と校長先生とはメールや電話でやり取りをしていたことから、「それが先生方に共有されている方が学校側も話が共有しやすいのだな。」と私は思いました。思いつきでやっているのではなく、計画的にやっているということをお伝えした方がよいと考えました。

◇校長先生と話をしているのですが、「できるだけ連携のことは、ほくだけではなく教頭や教務主任にも資料を送ってください。」という話がありました。同じ情報をいっぺんに共有できる、共有できた方が学校側も話がしやすいかなと考えています。

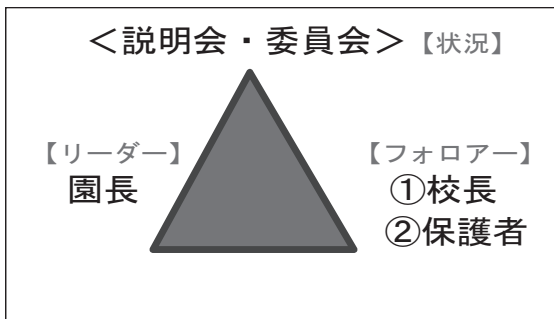
◇園内の先生方にも「図書館の活用が可能であること」をできるだけはやく伝えなかったのが、朝会の際に「無理にではないけれど、もし図書館を使える状況になったら進めていきましょう。」「特に年長さんは、行けたらいいですね。」という話をしていました。

◇今回の実践に主任と担任の先生がうまくつなげてくれました。私だけでなく先生方がねらいや意図を理解してくれて、やってくれているなと思っています。

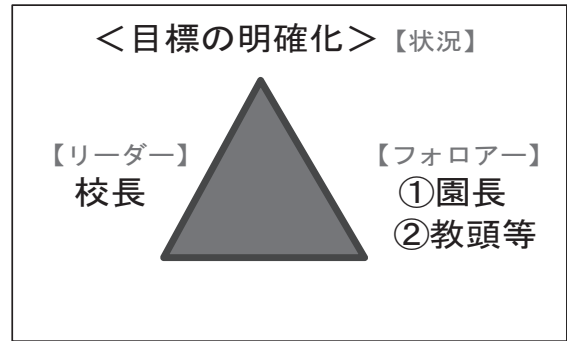
先生方が生活を豊かにすることをねらって、「連携を何とか図り、子どもたちの経験を積み重ねさせたい。」という思いをみんな分かっていると思います。

園長はコロナ禍で途切れていた幼小連携の取組を再開すべく、「教育説明会」や「学校関係者委員会」等の場を最大限活用して、校長への呼びかけや保護者への意識付けに取り組んでいる。園長は経営方針にある「小学校との連携・接続」の具現化に向けて①校長との幼小連携の意思確認と共有、②保護者への情報発信と理解・協力を求めようとしている。

一方、校長は「ただお願いすることだけでなく、ねらいや意図が大事ですね。」と園長との対話を通して、計画的・組織的な交流活動が展開できるよう「目標の明確化」を提案している。



【図1】リーダーシップ実践の構成



【図2】リーダーシップ実践の構成

また、「できるだけ連携のことは、ほくだけではなく教頭や教務主任にも資料を送ってください。」と述べており、教職員との情報共有と役割の分散化を意識していることが伺える。

園長も「それが先生方に共有されている方が学校側も話が進めやすいのだな。」と受け止め、幼小の教職員が共有できるよう会話の内容を「一覧表」にまとめ可視化を図っている。「一覧表」は、主任や学級担任、教頭や教務主任等の共通理解を図るツールとして機能し、認識の共有と役割の分散化へとつながっている。

一連のプロセスから、次のようなトップリーダーとしての認識とマネジメント行動を読み取ることができる。

<トップリーダーのマネジメント行動>

- ① 「教育説明会等における情報発信」を通した園長によるトップリーダー同士の認識の共有と保護者への情報発信
- ② 校長の提案による交流活動の「ねらい（目標）」の明確化
- ③ 園長による教員間の共有を図るための「一覧表」の作成と資料の配布
- ④ 朝会や職員会議を通した活動のねらいと今後の方向性の教職員への周知

①～④のマネジメント行動は、途切れていた幼小連携の取組を再構築するために、学校間のトップリーダーによる連携ビジョンの共有プロセスを示していると言える。

園長と校長によるリーダーシップ実践は、状況に応じたリーダーとフォロワーの相互作用により、学校間を乗り越えた教職員の協働意識や共有ビジョンの形成につながっていくものと考えられる。

(2) 主任と学級担任のリーダーシップ実践

<主任の聞き取り調査から> (下線は筆者の記述)

【P：計画段階】

◇私は「連携がとれる。」、担任は、「今、二人の幼

児が自信をもって取り組んでほしい。」ということを考えていました。それぞれの思いに共感し、理解しあえた状況でした。

◇私たちは、遊びや保育の流れのじゃまにならないようにやりたかったという思いがありました。子どもの思いが出てきたときに、小学校へつなげたいと思いました。「自然の流れでいきたい。」「子どもの思いからつなげたい。」そのような中で「子どもの成長を支えたい。」「子どもの経験を積み重ねたい。」という思いが私と学級担任にはありました。

◇今、この立場（主任）だと、自分が担任している子どもがいない状況です。子どもの思いと言っても無理やり取り上げて「連携」につなげることは、自分としては本意でした。

◇子どもたちの興味・関心から、担任の先生と思いを共有できたことにより、子どもたちの好奇心・探究心を満たすことができました。そして、小学校につなげることができたことは、保育の流れや遊び、思いに寄り添う形で実現できたのではないかと考えています。

幼稚園の生活では、生活の自然な流れを大切にすることで、幼児の意識や必要感、興味・関心と関連して、連続性を持ちながら生活のリズムに沿って展開されることが必要である。

主任は、「私たちは、遊びや保育の流れのじゃまにならないように・・・。」と述べており、「一人一人の幼児の思いや願いからスタートし、望ましい経験を積み重ねる幼児教育」について学級担任と確認し合いながら認識の共有を図っている。主任は、組織における立ち位置としても、関係性においても、管理職と保育者の「間」にいるリーダーであり、立場上どちらにも属する存在である。²²⁾子どもの願いを実現したい学級担任と幼小の連携を再構築したい園長の考え方の双方を受け止めたリーダー行動が求められる。

本事例では、第一義に「子どもの思いが出てきたときに、小学校につなげたい。」との意識から、主任は「連携ありきの実践」にならないよう配慮している。学級担任との認識を共有し、保育のねらいを実現すべく「連携」を手段として認識している。その一方で園長の願いの実現を図る行動は、ミドルリーダーとして幼小連携の再構築を支援するリーダーシップ実践と捉えることができる。

(3) 校長と主任のリーダーシップ実践

カエルの卵の飼育保育実践は、4月25日（火）の朝の出

来事から始まった。図書館訪問に至る過程においては、主任と校長のメールや園だより等を通した双方向のやりとりがあり、ここに幼小連携ならではの特質を見ることができるといえる。

＜主任の聞き取り調査から＞（下線は筆者の記述）

【D：実践段階】＜主任と校長＞

◇校長先生にお手紙を届けるために小学校へ向かいました。校長先生は不在でしたが、①すぐ校長先生からお礼のメールが届きました。

「早速、本校図書館にお子さんのアンテナを向けるかわり、脱帽です。本校図書館のいろいろな事情もありますが、できるだけお力添えさせていただきます。」

◇「探している本がありそうだよ。」と、図書館の本の写真を添付して①校長先生よりお手紙としてメールが届きました。

◇その後、「実際に行ってもよいですか？」と私は教務主任の渡辺先生とのやり取りをしました。

◇私はカエルの卵の飼育保育実践の経緯を掲載した②園だより（4月28日発行）を、午前中に区内の小・中学校へメールで送信しました。

◇保護者の方にも分かるように③ドキュメンテーションを作成（4月25日作成）し、園の玄関前に掲示しました。また、③その様子の写真も校長先生に送りました。

◇その後、「園だより第2号を受け取りました。」と②校長先生から返事がきたことから、私と担任の先生は、校長先生のメールを子どもたちに紹介しました。（5月2日）

そして、「このように子どもたちに紹介しました。」と②幼稚園の子どもたちの様子を校長先生に写真（メール）で送りました。

◇校長先生は「このゆびとまれ！」（自校の職員に対する校長通信）に掲載し、④小学校の職員の方々に紹介してくれています。シリーズ通信を幼稚園にも送ってくれています。

◇校長先生は私が作成した「幼小連携の交流計画」についても記事として掲載し、小学校の職員へ紹介してくれました。

◇何時もすばらしくタイムリーに分析し、記事に取り上げてくださっています。連携の推進については、校長先生の存在が大きいです。

主任と校長は、図書館訪問の実現に向けて、その時々々の状況を踏まえたリーダーとフォロワーの関係性の中で、主に次のようなプロセスを経ながら取り組んでいる。

＜訪問実現に向けたプロセス＞

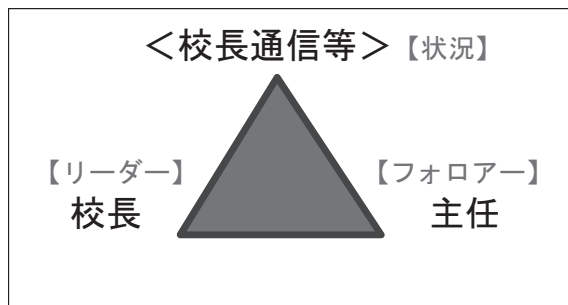
- ① 校長先生からのお手紙の返信
- ② 「園だより」の区内への情報発信と校長の返信
- ③ 保護者への「ドキュメンテーション」とその紹介
- ④ 「校長通信」の幼小教職員への情報発信

特質すべき点は、もちろん園長も理解した上でのことであるが、幼稚園の主任と小学校の校長がメールや園だより、校長通信等を活用し、子どもたちや保護者の様子について情報交換していることである。

通常、学校種の違うトップリーダー（校長）とミドルリーダー（主任）が直接的・継続的にコミュニケーションを図ることは少なく、校種や職位の枠を乗り越えたリーダーシップ実践と見ることができる。



【図3】リーダーシップ実践の構成



【図4】リーダーシップ実践の構成

本事例では、校長が幼稚園の思いを受け止め、小学校の図書館訪問が実現できるよう主任とメールや園だより等を活用したうえで全教職員にきめ細かな情報共有や時間調整等を行っている。

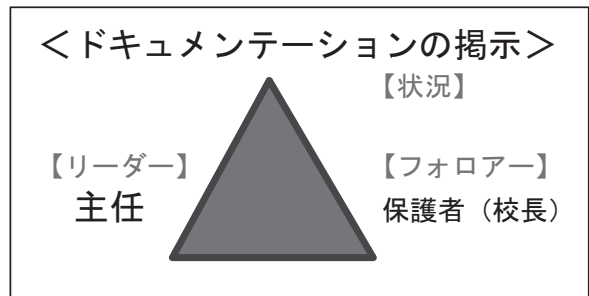
さらに校長は、自校の教職員への「校長通信」について園長・主任を介して幼稚園にも提供し、交流活動の状況を幼小の教職員間で共有できるツールとして活用しているところに特色がある。

これは主任等の思いの実現と自校における教職員の連携に関する意識の向上を図ろうとする校長の戦略的なマネジメント行動であると言える。主任の「校長先生の存在が大きいです。」の言葉からも、連携が創り出す学校

間を越えたリーダーシップ実践の実像を見ることができる。

主任は保護者の理解を図ることをねらい、図書館の訪問当日にドキュメンテーションを作成し、幼稚園の玄関前に掲示した。幼小連携の再構築を図ろうとする取組については、教職員のみならず保護者等の理解が必要不可欠である。幼児たちの喜びや充感を保護者にも伝え、共有してもらいたいとの主任思いが感じられる。

その後、家庭でのカエルの卵の飼育活動へと発展していったことは、主任のリーダーシップ実践が子どもたちの喜びや充実感をもとにさらなる学びの連続性へつながったものと言える。



【図5】リーダーシップ実践の構成

IV. 考 察

幼児教育と小学校教育の滑らかな接続については前述した倉橋惣三が「幼稚園から小学校へ-幼稚園と小学校幼年級の眞の聯結-」（倉橋 1923）において提起した「幼児教育の生活や学びの在り方を小学校の幼学年級（1・2年次）で行っていくこと」を起点として、幼稚園教育要領等の改訂や『幼保小の架け橋プログラム』など昨今の動向まで概観しながら、今日的な課題も明らかにしてきた。

本稿では園長及び主任の聞き取り調査等をもとに「カエルの卵の飼育保育実践」をカリキュムラ・マネジメントの視点から分析・考察し、本実践から次のような知見を得ることができた。

1 幼児教育におけるカリキュムラ・マネジメント

幼小連携の取組を推進していく上で本質的な課題は、幼小の指導観やねらい（目標）、見取り（評価）の考え方など「幼小の教員間にある認識の違い」にどのようにアプローチしていくかであると言える。

本研究では、認識の違いを乗り越えた「教員間の接続＝つながり」を志向しながら、幼小の教員がともに理解を深め共有できる手立て等を模索してきた。本稿では今回、幼児教育における「保育の展開プロセス」と「保育

の見取り」の2点について着目した。

(1) 保育の展開プロセスについて

幼児教育における保育の展開は、遊びを通しての総合的な指導を基本に、環境の構成や教師のかかわりを工夫したプロセスの中で環境を通して幼児の望ましい育成を目指し行われるものである。

本稿では幼小の教員間でより保育の展開の理解が図られるよう、小学校教育におけるカリキュラム・マネジメントの考え方を加味し、前述の【表1】のように保育の展開を一度整理した。このことは保育の展開をPDCAサイクルに置き換え対比しながら、計画から改善までのステップを幼小の教員間で語り合える土俵づくりとしたと考えている。

さらに幼児教育のプロセスと親和性の高い生活科の学習過程と関連付け、幼小間で共有できる保育展開の見方について、前述の【表3】のようにまとめ提案した。今後、幼小連携・接続に関するカリキュラム開発を考えていく場合、幼小の教員同士が子どもの発達や学びの連続性を意識して交流計画を立案し実践を積み重ねていく際に「共有のものさし」として活用できるものとする。

(2) 保育の見取りと生活科の評価規準について

本稿では、前述の【表3】のようにカリキュラム・マネジメントを踏まえ、「カエルの卵の飼育保育実践」における「保育展開プロセス」について提案した。本保育実践に関わらず、日々の保育のカリキュラム（指導計画）については、一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開して必要な経験を得ていけるように評価・改善を通して変えていく必要がある。

幼小連携の取組の実際では、幼児や児童の姿をどのように見取り評価し、次の活動に向けて改善し保育や教育活動の質の向上を図っていくかが最も重要である。しかし、幼小の交流活動を実践する中で指導方法や評価の考え方の違いにより「見取り」の捉え方にも違いがあり、園内研修や幼小合同研修の際に意見がかみ合わないなどの課題も見られてきた。

そこで本研究では、幼児教育の評価の「幼児の発達の理解」に生活科の評価の考え方を援用して幼児の姿を見取ることで、幼児期の教育に携わる教職員には児童期の教育へのつながりを、児童期の教育に携わる教職員には幼児期の教育の効果を確認してもらえるのではないかと考えた。

具体的には、幼児の育ちを読み取るための評価として、生活科の評価規準を用いて行った。保育展開のPDCAサイクルの評価・改善段階において、想定できる子どもの姿を生活科の評価規準の表記を活用し、「期待

できる子どもの姿」として仮説的な行動指標を指導計画に位置付けた。このことにより、幼児の育ちの見取りを幼小の教員同士で共有できると考える。しかし、「期待できる子どもの姿」として仮説的な行動指標を指導計画に位置付けることは、幼児教育の本質から、次の点について十分配慮していく必要がある。

幼児教育における評価は、幼稚園教育要領解説にあるように、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評価によって捉えるものではなく、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすものである。²³⁾その指導の改善をするためには、幼児一人一人がどのような姿を見せていたか、どのように変容したか、具体的に何ができるようになったかを確認することで、次の保育に生かすことが重要であるとする。

本研究ではカリキュラム・マネジメントの考え方を大切にしながら幼小連携・接続の実践を通して保育や教育活動の質の向上を目指すことを重視している。その前提のもと、幼小連携・接続に関する交流活動等の評価・改善を進める「共有のツール」として、幼小の教員同士の相互理解を図る一つの方法として生活科の評価規準を暫定的に活用することを提案したものである。

(3) 「カエルの卵の飼育保育実践」について

幼児教育は、幼児一人一人の興味・関心のもと、その思いや願いを最大限に受けとめ、望ましい体験や経験を積み重ねていくところにその本質がある。

主任の大高先生は、聞き取り調査の中で次のように述べている。

私たちは、遊びや保育の流れのじゃまにならないようにやりたかったという思いがありました。子どもの思いが出てきたときに、小学校へつなげたいと思いました。「自然の流れでいきたい。」「子どもの思いからつなげたい。」そのような中で「子どもの成長を支えたい。」「子どもの経験を積み重ねたい。」という思いが私と学級担任にはありました。

「遊びや保育の流れのじゃまにならない」という言葉からは、第一義に「幼児の思いや願いを生かす」、その延長線上に、「手段としての幼小連携の取組」があることを意識していることが伺える。図書館訪問が目的ではなく、幼児一人一人の育ちを、資質・能力の育成に目を向けているところに主任や学級担任の保育の本質を踏まえた専門性を感じることができる。

本実践では、幼児は興味をもったカエルの飼育に主体的に関わり、心も頭も体も動かして様々な対象と直接関わりながら、総合的に学んでいく幼児教育の目的である

「学びの芽生え」が育つ実践であったと評価できる。また、同じ疑問をもつ仲間、担任教諭、主任教諭、小学校教諭との関わりの中で、対話的で深い学びが実現したものと考える。

2 幼小間の接続を支えるリーダーシップ実践

本研究では、カリキュラム・マネジメントの視点を通して、コロナ禍後の幼児教育から小学校教育への接続の実際について分析することを試みてきた。その際、モデルを援用し教育活動系列と経営活動系列の2つの側面から保育実践の実像に迫ろうと考えてきた。

モデルの経営活動系列の側面から、本研究ではトップリーダーである園長と主任の聞き取り調査の中から、幼小間の接続を支えるリーダーシップ実践に着目し、「分散型リーダーシップ理論」に基づき各リーダーの認識やマネジメント行動を明らかにしようとした。

(1) 保育実践を支えるリーダーシップ実践

前述した園長及び校長、主任のリーダー行動は、その時々状況の変化により様々な課題解決を求められてきたが、問題場面に応じてリーダーとフォロワーが入り替わり分散化されたリーダーシップ実践が行われた。コロナ禍後における幼小連携の取組の再構築がスタートできた要因として、次のことをあげることができる。

一点目は、共有する場の設定である。コロナ禍後に後戻りした幼小連携の取組は、連携・接続の組織化をリードするトップリーダー（園長や校長）にとって、そのビジョンを関係するステークホルダーに浸透させていくことが求められる。

取組の推進に向けた保護者等の理解に向けて幼稚園の説明会や委員会を通して、園の基本的な考え方や今後の方向性について明示する場、関係者と共有する場として活用している。また、校長もその場に同席していることから、トップリーダー同士の意思確認の場としても機能していると考えられる。「ステップ1」の状況からの取組を駆動させるために、組織間の「情報の共有」は必要不可欠な要素であり、意図的・計画的な「共有の場づくり」が重要である。

二点目は、「ツールの効果的な活用」である。本事例では園だよりや校長通信等をメールでやり取りし、幼小双方の状況を伝え合いながら活動内容の共通理解を図っている。通信等をツールとして活用し、お互いの活動内容を可視化し情報発信している点に特色がある。これは異校種における教職員間の認識の共有化を図る手立てとして有効であり、効果的なリーダーシップ実践として捉えることができる。

三点目は、校長と主任のやり取りの「スピード感」と

「頻度」である。幼児の図書館訪問が実現するまで実質8日程度の時間であった。その短い期間に交流活動を実施できた要因として、通信等のやり取りの回数が多くスピード感があったことである。短期間に素早く数多くのメール等のやり取りが行われることによりお互いの情報の接触頻度が高くなることから学校間連携に必要な情報共有の効率的・効果的な展開につながるものと考えられる。

さらに主任の情報発信や行動を受けた校長の対応の速さは、主任の園内における学級担任等とのコミュニケーションの活性化を促すミドルのリーダーシップ実践²³⁾を引き出すことにつながるものであり、トップリーダーがリードするミドルへの支援と考えることができる。

(2) 学校間連携を支えるリーダーシップ実践

異校種間の連携については、自分が所属する組織におけるリーダーシップの分散と自らが他校種の組織に介入するクロス分散したリーダーシップ実践が考えられる。通常、分散型リーダーシップは「園長と主任」「校長と教務主任」「主任と学級担任」など同一組織内における分散化を想定する。しかし、本事例の場合、加えて「園長と校長」「校長と主任」「主任と教頭」「主任と教務主任」等のリーダーとフォロワーの関係性の中での分散化されたリーダーシップ実践を考えていく必要がある。

- ◇トップリーダー同士のリーダーシップ実践
- ◇トップとミドルによるリーダーシップ実践
- ◇ミドルリーダー同士のリーダーシップ実践

異校種による学校間連携については、①～③の組合せとそれぞれが置かれた状況を加味しながら連携組織の再構築を図る必要があり、ここに幼小連携の取組を推進していく困難性を見ることが出来る。

このような困難性を乗り越えるためには、次のようなことについて、考えていくことが必要になる。

- 園長及び校長（トップリーダー）には、幼小間連携全体を「ネットワーク」として捉え、学校間連携を組織化するリーダーとして協働的な経営形態を構築することが必要である。
- 園長及び校長（トップリーダー）には、連携組織の状況に応じて主任や学級担任、教務主任等が学校種を超えて分散化されたリーダーシップが発揮できる「開かれた連携組織」を構築することが必要である。
- 小学校の校長と幼稚園の主任との関係に見られるようなリーダーシップ実践を実現するためには、双方に教員の職位（役職）を乗り越える信頼関係や認識の共有が必要である。その際、特に職位が上位である校長や園長には、「幼小連携チーム」としてネッ

トワーク全体を俯瞰的に捉えようとする思考とマネジメント行動が求められる。

○ミドルリーダーには、「幼小連携チーム」の一員として同僚と協働しながらリーダーシップ実践を行っていくことが求められる。本事例からは、異校種の校長との関係性の中で主任が学級担任等と協働したリーダーシップ実践を遂行するためには、「通信等を活用した情報の可視化」と「スピード感を持った双方向の情報発信」が重要であると考えられる。

V. 成果と課題

本研究では、コロナ禍後の幼児教育から小学校教育への接続の実際についてカリキュラム・マネジメントの視点から保育実践の展開プロセスや園長や校長、主任のリーダーシップ実践について考えてきた。以下、成果と課題について述べる。

(1) 研究の成果

本研究では、一つの保育実践についてカリキュラム・マネジメントの視点からモデルを援用し、「教育活動系列」と「経営活動系列」との関連性を含めた両側面からの分析を行い、次のような知見を得ることができた。

1点目は、「教育活動系列」では「カエルの卵の飼育保育実践」について、生活科の学習過程を加味した保育の展開プロセスを作成し、幼児教育における教育課程のPDCAサイクルの明確化を図ったことである。また、幼小の教員間における保育の見取りを共有するために、PDCAサイクルの評価・改善に向けた一つの手法として生活科の評価規準を活用する試案を提案したことである。

幼小の教員同士が抱える指導観やねらい、評価の考え方の違いを乗り越え、合同研修等において「共通のものさし」をもって学び合えることを想定したものである。このことにより、一連のPDCAサイクルを意識した取組の検証・改善が少しずつ可能となり、保育実践の積み重ねによる継続的な推進に寄与するものと考えられる。

2点目は、「経営活動系列」に着目することにより、分散型リーダーシップ理論に基づいた幼小連携の取組を支えるステークホルダーの認識やマネジメント行動を明らかにしたことである。

具体的には、本事例に限ってであるが園長や校長、主任の思いや願いを背景に、その時々状況が各リーダーの認識や行動にどのような影響を与えるのかについて明らかにしたことである。幼小間の接続を考える場合、組織内外における校種間を跨いだ各リーダーの動きが求められる。本事例では、園長と校長のトップリーダーの

リーダーシップ実践や校長と主任という職位が異なるリーダーシップ実践の実像を見ることができた。その際の際の要諦は、「情報の相互共有」「ツールの活用」、信頼関係に裏打ちされた「職位を超えたスピード感」であった。

また、幼小に限らず小中、中高等の学校間連携という枠組みからは、異校種という組織間の協働体制の確立の難しさが見られてきた。本事例からは新たな組織体制の構築には、園長や校長による幼小の接続に向けたビジョンの共有が求められ、そのための効果的なリーダーシップ実践を模索していく必要がある。また、トップリーダーのビジョンを浸透させるミドルリーダーの役割も重要であることが主任の認識や行動から明らかになったと考える。

(2) 今後の課題

上記の成果を踏まえ、今後の課題について述べる。

1点目は、今回の研究は一つの保育実践の事例であり、サンプル数の観点から一般化することに困難性がある。この点については、本研究方法の限界でもあると考える。

今後、引き続き保育実践の事例検証を積み重ねることにより、少しでも払拭していきたいと考える。

2点目は、保育の見取りについて、生活科の評価規準を仮説的に援用したが、幼小の教師が実際の保育や教育活動において活用可能であるのか、実践検証を積み重ねていく必要がある。あくまでも幼小の接続の成果をどのように見ていくのかが問われていくことに着目する必要がある。評価観の違いによる教員同士の見取りの混乱を意図するものではない。保育の本質を踏まえ、幼小の教師から検証の在り様について謙虚に意見を聞きながら、方向性をともに構築していきたいと考える。

今後、合同研修における検証・改善と学び合う教員集団の形成を目指し、幼小の接続のPDCAサイクルと見取りの在り方について模索していきたい。

3点目は、幼小接続の教育活動を組織化するリーダーシップ実践である。効果的な保育実践が展開されるためには、学級担任等の実践を支援する側の存在にも目を配っていく必要がある。本研究では園長や校長、主任のリーダーシップ実践の実像を探ってきたが、1点目の観点から本事例のみの結果である。

今後、幼小接続の教育活動を組織化する具体的なリーダー像を明らかにするため、実践・検証を積み重ねていきたいと考える。

VI. 謝 辞

本研究に取り組むにあたり、札幌市立あつべつきた幼稚園並びに札幌市立厚別北小学校の実践の紹介、聞き取りへの協力を得て、報告することが出来ました。ご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。

VII. 引用文献

- 1) 倉橋惣三, 幼稚園から小学校へ-幼稚園と小学校幼年級の眞の聯結-, 幼児教育第23巻4号, 日本幼稚園協会, 1923, p133-139
- 2) 教育課程審議会答申, 1987
- 3) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告), 2010, p9
- 4) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告), 2010, p16
- 5) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告), 2010, p22
- 6) 磯鳥年成・西出勉・大室道夫, 幼小連携の在り方についての一考察, 2023, p6
- 7) 中央教育審議会初等中等教育分科会, 学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～, 2023, p7
- 8) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告), 2010, p26-27
- 9) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告), 2010, p26-27
- 10) 文部科学省, 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開, チャイルド社, 2021, p3
- 11) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, フレーベル館, 2018, p100-104
- 12) 文部科学省, 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開, チャイルド社, 2021, p69-100
- 13) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説総則編, 東洋

- 館出版社, 2018, p4-5
- 14) 文部科学省, 小学校学習指導要領生活編, 東洋出版社, 2018, p43-45
 - 15) 文部科学省, 小学校学習指導要領生活編, 東洋出版社, 2018, p90
 - 16) 文部科学省, 小学校学習指導要領生活編, 東洋出版社, 2018, p90
 - 17) 文部科学省, 小学校学習指導要領生活編, 東洋出版社, 2018, P8
 - 18) 文部科学省, 小学校学習指導要領総則編, 東洋出版社, 2018, P74
 - 19) 国立教育政策研究所教育課程研究センター, 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料, 東洋館出版社, 2020, p40-41
 - 20) 田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵 編著 「カリキュラムマネジメント・ハンドブック」ぎょうせい, 2016, p39
 - 21) 国立教育政策研究所教育課程研究センター, 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料, 東洋館出版社, 2020, p40-41
 - 22) 野澤祥子・淀川裕美・佐川早季子・天野美和子・宮田まり子・秋田喜代美, 保育におけるミドルリーダーの役割に関する研究と展望, 東京大学院教育学研究科紀要 第58巻, 2018, p387～416
 - 23) 野澤祥子・淀川裕美・佐川早季子・天野美和子・宮田まり子・秋田喜代美, 保育におけるミドルリーダーの役割に関する研究と展望, 東京大学院教育学研究科紀要 第58巻, 2018年, p387～416

VIII. 参考文献

- 1) 天笠茂・小松郁夫, 学校管理職の経営課題 第2巻 これからのリーダーシップとマネジメント『新しい公共』型学校づくり, ぎょうせい, 2011, p138～146
- 2) 小島弘道・淵上克義・露口健司, スクールリーダーシップ, 学文社, 2010, p153～159

註釈:

- 1) 田村の「カリキュラムマネジメント・モデル」は、カリキュラム・マネジメントの全体構造を図的に表したものであり、教育活動系列（連関性）と経営活動系列（協働性）の2つの基軸により表記されている。また、本モデルは、7つの要素から構成されており、システム思考に基づいた要素間の関係性についても示されている。

※田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著

「カリキュラムマネジメント・ハンドブック」

ぎょうせい 2016より

本稿では、特にモデルの要素「カリキュラムのPDCA」及び「リーダー」に着目し、幼小連携の活動に関するカリキュラム・マネジメントについて分析・考察する。

- 2) 幼小連携の活動を推進するためには、園長や校長、教頭、幼稚園の主任、教務主任、研究主任等のリーダー層によって組織の状況に応じた学校種や役職を超えたリーダーシップ実践が必然的に求められることになる。

本稿では幼小間の様々な取組について「分散型リーダーシップ理論」の視点から考えていく。幼小の活動等において、その時々状況に応じたリーダーとフォロアーの相互作用に着目し、幼小連携の推進に向けた各リーダーのリーダーシップ実践について分析・考察を行う。

<リーダーシップ実践の構成要素>

【状況】

【リーダー】



【フォロアー】

※小島弘道・淵上克義・露口健司 著
「スクールリーダーシップ」 学文社
2010より